

夏の終り

堤 理恵

たとえば蝉。この町のすべてを知っているかのように、棲み分け、なき分ける。三年前、京都に引っ越して最初の夏に知った。この町では、自然と生き物とひとが、感情さえも織り交ぜ合いながら生きていく。神戸で生まれ育ち、長いあいだ徳島で暮らしたわたしにとって、京都に住まうということはハードルが高すぎたはずだ。何の勢いでここまでやってきたのか、自分でもうまく説明ができない。けれども、この蝉の音が汗とともに心におちていく夏に、ここで暮らせてよかった、と思う。生きていてよかった、とさえ思う。

小学五年生の夏。寂聴さんと同じ年齢の祖母は、自分の人生が小説を超えるほど激しいものだったから「そういう

ことは心がつかれる」といい、けれどもわたしには「人生のためにたくさん本を読みなさい」と、どんな本でも買ってくれた。内容が「安全」か、確認したりもせずに。祖母とは喫茶店と同じくらい、週に何度も、本屋に行った。

わたしは詩人になりたかった。みずみずしい言葉を生み出せるひとに。そんな夏の日に出会ってしまった『夏の終り』は震えるほどの衝撃だった。見てはいけないものを見てもしまったような後ろめたさ、あるいはそれを超えた取り返しのない気持ち。「女として生きていくこととはこういうことなのかもしれない」と、孤独で、かなしくて、でも、うつくしくて、幸福で、そして強いのだと震えた。わたしはこの「安全」ではない感情をどうしていいのかわ

からず、本棚ではなく机の抽斗の中に隠した。苦手だといえないかき氷を食べた時よりも、長いあいだ頭痛が続いた。容赦なく暑い。家のそとでクマゼミが今年も一生懸命になく。ここにいるよ、ここで生きているよと。『夏の終り』のような狂おしさはなく、声はそつと耳を抜けていく。わたしはもう、その本を抽斗に隠す必要はなくなつた。

たとえば風。たとえば手紙。みんな強い意思をもつて運んでくる。食べ物も、季節も。あるいは、しあわせであったり、かなしみであったり。

あの十歳の夏から十五年。詩人にはなれなかつたし、それどころかまったく違う道に進んだけれど、「青少年のための寂聴文学教室」に参加した。文学教室は毎回が風のようにだった。風のように心を軽くして、時に力強く、そして温かだった。寂聴さんが毎回ホワイトボードに書いた「縁」を、わたしたちひとりひとりがとても大切にした。

わたしたちは寂聴さんに宛ててたくさん手紙を書いていく。わたしが送った最初の手紙がここにある。自分の恋について、災害と孤独の中で生きることについてどう向き合うかについて、文学少女ぶっている自分が恥ずかしい。毎回の教

室で寂聴さんはひとりひとりの宿題(手紙)に言葉をかけ、本や人を紹介してくださつた。二回目の教室でわたしは『夏の終り』を読みなさいと言われ、あの本と再会する。ひと、場所、本、色々なことが時を超えて交錯していく。

読むことと書くこと。あの文学教室が終わつた後、その記録は書籍化されず、文学よりも人生の教室なのではないか、という意見もあつた。けれどわたしはやはり文学教室だつたと改めて思う。手元には、その一回一回のすべてを記録したものと、一年間の写真がある。あれから二十年。忘れていた、もう戻ることのできない懐かしい光景は、せないけれど温かい匂いがする。中学生も、大学生も、社会人も、みんなそれぞれに生きることと真摯に向き合い、ずっと昔から一緒に育ってきたような笑顔は、同じ方向を向いていた。毎月の教室に加えて、阿波踊り、寂庵訪問、初回寂聴塾の先輩たちとの時間、卒業制作。そしてたくさん書いた手紙。

文学教室を卒業してもわたしは何度か手紙を書いた。けれど、一度も出せなかつた。出せなかつたけれど、「書く」ということが自分を救うことだつたと、今になって思う。「書きなさい」という言葉はきつと、「生きなさい」だつた。

逃げないで。風になってわたしは走る。

夏の雨はきまぐれだ。積乱雲はなんの前触れもなく、あたかもそこで力を貯めていたように大きなバケツとなり、「上を向けよ」とたくさんの水を痛いほど勢いよく降り落とす。世界が洗濯槽のように攪拌され、景色は力づくに次の道を示していく。

わたしが結婚を決めていたのとは違う人と結婚したいと言いだしたとき、それにも関わらず離婚しようと思うと言いだしたとき、何度も寂聴さんに助けを求めた。寂庵を訪れた夜はいつも雨だった。雨の音、朱色のくつした、眠れないときのためにと借りた本。雨があまりにもせわしなく降るから、言葉も涙も溶けていくみたいだった。雨があがったとき、わたしは上を向いている。

わたしの好きな京都の雨、そして水。ほんのりあまく、芯のない柔らかさ。京都に暮らしはじめて、自分の家の前の堀で水を汲んでいるひとをみるようになり、生活と水の距離感が変わった。かつて寂聴さんも暮らしたという廬山寺の近く、梨木神社の染井の水は、三名水といわれながらも、京都の日常だ。大きな楠の葉が午後の陽を透かし、葉

裏で金色の光がちらちら揺れているなか、ひとり、またひとりと空のペットボトルを持ってやってくる。手水鉢のような口から湧き出す水は驚くほど澄んでいて、水というより空気が水蒸気をまとわせているようだ。何百年もの地層の冷たさを飲み込んで、いままなお絶えず湧き出しているその水のなかにも、小さな都の歴史が眠っていて、寂聴さんがここにくらした一九五〇年頃が遠く昔のことにも、昨日のような顔で存在する現在のことにも思えてくる。

『いずこより』の中で寂聴さんは、もうすっかり忘れていたこの時代の日記を見つけている。何度も「死にたい」とあるという。出奔してたどり着いた京都。大学時代の友人の下宿という北白川平井町の家は、歩いてみると、家こそ新しくなっているものの表札の名前は変わっていない。時だけが何ごともなかったかのように通りすぎていく。大翠書院が閉じられて仕事がなくなり、行くあてがなくても朝早く起きてお弁当を作った日々。友人がいても、新しい仕事を得ても、この地に存在する孤独という孤独がひとりの華奢な女性のなかを水のようにひたひたと流れていく。社会的居場所と心の居場所、その両方を必死で自分の足につなぎながら、切に生きる女性が、身近にも果てしなく遠

くにも感じる。

鴨川河畔の低木ではニイニイゼミが「チーチー」と小さく鳴く。京大附属病院時代には、寂聴さんは聖護院界隈に暮らしているが、この辺りも今のように舗装された道はなく、雨が降ると泥道になったという。瓦屋根の町家。格子窓越しの雨にどれだけ不安をつのらせたのだろう。小さな商店は今もわずかに残っている。行き交う買い物かごをもつ人々。その屋下がりの家族の匂いにどれだけ胸を詰まらせたのだろう。

「小説は、ひとの人生を超えない」とはいうけれど、寂聴さんはその境を静かに超えているようだ。言葉は震えながら、水のように流れる。ときに、目の前の景色を揺らして映す水鏡は、小石の落下にさえ波紋を広げてしまう。あるいは。行き場をなくした感情の堰を切り、涙となって溢れる奔流にもなる。押し寄せる物語のうねりに、時に呑み込まれ、時に岸边へと押し戻される。その揺さぶりでわたしはあの十歳の夏から何度も自分を生かし直し、閉じかけた心を開いてきた。水蒸気が雨となり、やがて雨があがるたびに上を向く。それがわたしにとっての寂聴文学だった。寂聴文学に生きる女性たちは、激しく戦っているから心を

燃やすのではなく、必死に生き、自分の感情に対して真摯に向き合っているから心を揺さぶられる。残されたのは、そうとしか生きられなかった、まっすぐな想いなのだと思う。自分の感情を受け入れるということ。自分の選択に納得するということ。哲学のような詩の行間にあるのは夢でも作り話でもなく、生きるための実学なのかもしれない。超えようとしている言葉と今いきている世界の壁は、シャボン玉のようにはかない。

東山から陽がのぼり、やわらかに弧を描きながら嵯峨野へと静かに沈んでいく。毎日異なる空の色の変化は美しく、いとおいしい。過去の傷も、未来の夢も、目の前の時間に溶け合い、一日をつくりだす。その一日さえ丁寧に生きることでできれば、きっとそれでいい。遠い日の寂聴さんの足跡をこの町にみつけながら、どこかにつながる今日という日を、するつと玉のように連ねていく。

雨がやむのを待つてヒグラシがなきはじめた。風はかすかに秋を孕んでいる。